〔大阪体育大学紀要
第39巻（2008）pp.265−275〕

研究ノート

日本近代化におけるポール・ケイラスの関わり

長尾　佳代子

2007年10月31日受付　2008年1月9日受理

Paul Carus as Involved in the Modernization of Japan

Kayoko Nagao

Abstract

This paper deals with Paul Carus as involved in Japanese cultural trends in the Meiji era. It shows that he left not so few tracks on the history of Japanese modernization. In addition to a few academic researches and his own works, I use here materials available at Morris Library of Southern Illinois University Carbondale.

1 はじめに

ポール・ケイラス（Paul Carus 1852-1919）はオープン・コート出版社の編集長として数多くの出版を手がける一方、自らも1880年から1920年の間に74冊の書籍と1,500の論文を著した。[1] その中には、日本やスリランカで仏教を再興するために教学のハンドブックとして使用された*The Gospel of Buddha* [2] や日本に印刷製本を外注した絵本 *Karma* [3] などが含まれる。絵本 *Karma* の日本語版『因果の小車』[4] は若き日の鈴木大拙（1870-1966）がアメリカに渡航後はじめて出版した翻訳本であり、その第4章は後に大正時代を代表する日本の小説家である芥川龍之介（1892-1927）の有名な童話『蜘蛛の糸』[5] の原

1) Harold Henderson, *Catalyst for Controversy—Paul Carus of Open Court*, Southern Illinois University Press, Carbondale and Edwardsville, 1993, p. 1.

2) Paul Carus, *The Gospel of Buddha*, Open Court Publishing Co., Chicago, 1894. この本の出版のいきさつ，内容，日本の宗教界に与えた影響等については，次の研究書に詳しい；Judith Snodgrass, *Presenting Japanese Buddhism to the West*, The University of North Carolina Press, Chapel Hill and London, 2003, pp.233-244. また、*The Gospel of Buddha*には鈴木大拙による次の邦訳がある；ポール, ケーラス著、鈴木貞太郎訳『佛陀の福音』、佐藤茂信、東京、1895。

3) Paul Carus, *Karma, a Story of Early Buddhism*, Open Court Publishing Co., Chicago, 1895 (1st edition). 1896 (2nd edition). 1897 (3rd edition).

4) ポール、ケラス著、釋宗演校閲、鈴木貞太郎訳『因果の小車』長谷川商店、東京、1897。この邦訳は国立国会図書館近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）で閲覧可能である。

5) 芥川龍之介「蜘蛛の糸」（鈴木三重吉編『赤い鳥』第1巻第1号、東京、1918）。

芥川はケイラスのテキストを読んでおらず、鈴木の日本語訳をもとにこれを書いた。芥川にはケイラスの著作の意図が分からず、『蜘蛛の糸』のプロットは混乱した。

長尾佳代子「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題——ポール・ケイラスが『カルマ』で言おうとしたこと——」『仏教文学』27、仏教文学会、京都、2003、pp. 161-172。

小林信彦「芥川龍之介が不用意に扱った素材」『国際文化論集』37、桃山学院大学、大阪、2008。

作にもなっている。この2冊を翻訳した鈴木はケイラスに師事するために渡米し、1897年から9年間ケイラスのもとで働いた。

本稿では、日本の近代化に焦点をあてつつ、ケイラスと様々な人々との関係を取り上げて、明治期の日本の文化的傾向を明らかにする。ハロルド・ヘンダーソン（Harold Henderson）の *Catalyst for Controversy* はケイラスに関する唯一の本格的な研究であり、本稿はこれに拠る所が多い。また、南イリノイ大学カーボンデイル校モリス図書館には書簡や文書など有益な資料が多く保管されており、筆者は2006年夏にこれを簡単に調査した。今回はこれらについても言及する。

2　明治期日本におけるサンスクリット学習――「国語」と「宗教」の確立

日本におけるヨーロッパ的教養教育の本格的な移入は1871年にドイツからミュラー（Leopold Müller 1824-1893.「ミュルレル」と表記されることが多い）とホフマン（Theodor Eduard Hoffmann 1837-1894）という2人の医学教師が招聘されて東校（東京帝国大学医学部の前身）に赴任したことに始まる。この2人は、医学教育を始める前に、まず、代数、幾何、歴史、ドイツ語、ラテン語などの科目により学生に基礎教育を施す必要があると判断した。そのためドイツから教師を呼び、予科教育の水準を上げるためのカリキュラムを作成した。[6] この東校（医学校）は1877年に南校と統合されて日本初の「大学」となった。

さて、1886年にこの南校が帝国大学文科大学に改称された際に、サンスクリット等を学ぶ「博言学科」（後の言語学科。「博言学」は philology の訳語）が設置された。当時、有識者の間では、日本語を国語として整備することが日本を近代国家に脱皮させるために不可欠な要件であると認識されていた。[7] 1880年の東京学士会院[8] において、後の帝大総長、加藤弘之（1836-1916）は、日本語を修正して文法を設定することが急務であるという前提で、現在の西洋諸語はもちろんのこと、サンスクリット、ギリシャ語、ラテン語などのインド・ヨーロッパ語を研究すれば得るところは計り知れない、と論じた。[9] さらに加藤がその10年後に上田萬年（1867-1937）をドイツに留学させ、そして、その上田の弟子の橋本進吉（1882-1945）の文法説が現在でも「学校文法」として国語科教育において重要な役割を果たしていることは周知の事実である。「国語」の確立という側面から日本の近代国家への脱皮を支援した加藤の期待に上田が応えたのである。なお、上田萬年は1885年に帝国大学文科大学に入学した和文学科の学生であったが、この博言学科の初代担当教師、チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850-1935）を敬愛し、学問上の影響を多大に受けている。また、京都帝国大学の梵語梵文学科の初代主任教授となった榊亮三郎（1870-1947）にサンスクリットを講じたのは、チェンバレンの後継者、ドイツ出身のフローレンツ（Karl Florenz 1865-1939）であった。

---

6)『東京大学百年史 通史一』第1編、第2章、第3節「大学東校・東校とその教育」、東京大学史資料室、東京、1984、p. 221-225。

7) 明治期において、文法の整備等によって日本語の同一性を確認しそれを「国語」としての認識することは、近代国家建設の作業の一端として行われた。この件について、詳しくは次の文献を参照されたい。イ・ヨンスク『「国語」という思想』、岩波書店、東京、1996。

8) 1874年に機関誌『明六雑誌』を発行した明六社は、明六会、東京学士会院、帝国学士院を経て現在の日本学士院に至った。

9)『東京學士会院雑誌』第2編第1冊「博言學議案」、東京、1880、p. 37。

この榊亮三郎は1907年に日本最初の本格的なサンスクリット教科書『解説梵語學』[10]を出版した。その前書きの中で榊は出版を勧めた仁和寺派管長土宜法龍（1854-1923）について次のように述べ、このサンスクリット教科書出版が必要であった背景を説明している。「師夙に歐米に遊び印度を經て歸る。其の觀光採風の途次、諸國の碩學を歴訪して大に得る所あり。至る所、梵學の研究日に隆盛なるを見て、深くわが國に於ける斯學の振はざるを慨し、夙に梵學振興の志あり…」。このように、日本におけるサンスクリット学習はドイツの高等教育が移入された最初期にほぼ同時に始められたものなのである。

ヨーロッパでサンスクリット学習が盛んだったのは、第一に、インド・ヨーロッパ語の1つとして言語学上重要な言語だったからだ。ヨーロッパ人にとって、サンスクリットは自分たちの言語の本質を知り起源を探る手掛かりであったのである。第二に、サンスクリットの発見によってヨーロッパ人は今まで全く知らなかった文学、宗教、哲学などが存在することを知り、その実態を究めようとしたからである。そしてそれら両方の動機とあわせて、植民地経営において必然的にこれを研究する必要が生じたという事情があった。インド人を統治するためにまずは古代の法律文献を細かく読み解かなければならなかったからだ。

一方、日本人をサンスクリット学習に駆り立てた基本的な動機は、仏教経典を原語で読みたいという希望である。その動機の底にはキリスト教文化に対抗し得る思想的基盤を仏教に求める気持ちがあった。これは、近代国家建設という目標と矛盾なく両立した。

ヨーロッパのキリスト教国には永い神学の歴史があり、その上で宗教改革を経て、聖職者や神学者以外の人々も聖書を信仰の拠り所とする習慣ができた。このような宗教に対する理知的な把握を重んじる習慣が、キリスト教国の学者達を植民地の土着信仰の聖典の編纂、翻訳へと向かわせたのである。他方、宗教を理知的に把握する習慣のない日本では19世紀になっても聖典の中身を読んで理解できる人は実はほとんどいなかった。当時の日本では漢訳仏典を専ら音読するだけで内容を理知的に把握することは行われていなかったのである。そこで、ヨーロッパのキリスト教国をモデルにして近代国家の建設を目指していた日本では、既に近代化を終えた外国の宗教を輸入するか、自国の習俗を洗練して宗教としての体裁を整えるかの選択を迫られた。それまで意味がよく分からないまま使っていた漢訳仏典を、サンスクリットやパーリ語の原典を探して解釈したり、欧米の言語で書かれた翻訳によって理解することは、その後者を目的とした基礎作業であった。

このような状況の中で、ポール・ケイラスの出版活動が日本の知識人によって注目されたのである。次に、ケイラスの教養のどのような特徴が当時の日本人にアピールしたのかについて述べていきたい。

3　渡米以前の修行時代

ポール・ケイラスは1852年、ルター派牧師の息子としてプルシャのシュテッテンに生まれた。少年時代について多くの記録は残っていないが、シュテッテンのマリエンシュティフ・ギムナジウムで彼に数学を教えた教師ヘルマン・グラスマン（Hermann Grassmann 1809-1877）については特筆しておきたい。グラスマンは「グラスマン多様体」（Grassmann manifold）で知られる卓越した数学者である[11]

10）榊亮三郎『解説梵語學』、真言宗高等中學、京都、1907。近代デジタルライブラリーで閲覧可能。

11）彌永昌吉監修、石井省悟・渡辺弘訳『クライン：19世紀の数学』、共立出版、東京、1995、pp. 176-185。原著は Felix Klein, *Vorlesungen über die Entwicklung der Mathematik im 19. Jahrhundert* , Springer, 1926。

と同時に、インドの古典宗教文献である『リグ・ヴェーダ』の辞書編纂[12]で知られるサンスクリット学者（ヴェーダはインド古典語であるサンスクリットのさらに古典である）、かつ「グラスマンの法則」によってインド・ヨーロッパ比較言語学に画期的な貢献を行った言語学者である。

このような優れた学者がギムナジウムで教鞭を取っていたという点にドイツの教養教育の水準の高さが反映されていると言えるだろう。その教え子であったケイラスも哲学と宗教にのみ近視眼的に取り組むということはなかった。彼は数学の学会に参加したし、著名な物理学者であるエルンスト・マッハ（Ernst Mach, 1838-1916）[13]と親密だった。[14]詩を書いたり作曲を行ったりもした。初等教育に関わる活動すら行った。

チュービンゲン大学において古典文献学で学位を取得したポール・ケイラスは、卒業後はドレスデンのザクセン王立士官学校の助教授に任命され、ラテン語、ドイツ語、歴史等様々な教科を受け持つ。在職中、彼は著書 *Metaphisik in Wissenschaft, Ethic und Religion*（科学における形而上学、倫理と宗教）[15]を出版し、聖書は偉大な文学ではあるが歴史的事実を反映したものではないという見解を示した。しかし、この著書の内容は公職者を養成する勤務先の宗教的な立場と相容れず、ケイラスは辞職することになった。

その後ドイツを離れるまでのどこかの時点で、彼はある日本人僧侶と出会う。この僧侶は彼に「いかなるドグマの信仰も規定しない」宗教を示し「豊富な思想の糧」を彼に与えた。[16]ケイラスに強い印象を与えた仏教徒とは北畠道龍（1820-2007）であった。第3次本願寺海外派遣留学生としてドイツを訪れていた彼は既に63歳であった。ケイラスが最初に邂逅した「仏教徒」が、明治大学の前身である講法学舎を設立し、武術に優れ、豪快なエピソードに事欠かないユニークな人物であったということは興味深い。[17]北畠道龍は僧侶ながら紀州兵を組織して西南戦争に出兵しようと計画し、本願寺の改革を図って島地黙雷らを粛清しようとするなど、極めて血気盛んな人物である。同時に、ベルリン

12）Herrman Grassmann, *Wörterbuch zum Rigveda*, Leipzig, 1873～1875.

13）ケイラスが後にアメリカで雑誌 *The Open Court* を編集した時、彼はそこでマッハの論文を数多く出版し、継続して連絡を取りあった。マッハとやりとりした数多くの書簡はモリス図書館に保管されている。

14）宗教と科学の融合を目指した *The Open Court* において、科学は不可欠な課題であった。マッハの論文のほかにも、動物学者の August Weisman や数学者のGeorg Cantorの論文が載せられた。

また、「古い世界と新しい世界の間に重要なリンクを結ぶ」ことは彼の編集方針の一つであった（Henderson, op. cit., p. 118）。*The Open Court* には哲学者として Lucien Levy-Bruhl、心理学者として Alfred Binet、Teodule Ribot、アッシリア学者として Friedrich Delizsch、インド学者としてマックスミュラーは言うまでもなく Richard Garbe、Hermann Oldenbergら、ヨーロッパの学者たちの論文が載った。

15）Carus, *Metaphisik in Wissenschaft, Ethic und Religion*, Dresden, 1881.

16）Henderson, op. cit., p. 90.

17）「あばれ道龍」「はいから弁慶」などと呼ばれ数々の逸話を残した北畠道龍については、次の歴史小説で知られている；

神坂次郎『天鼓鳴りやまず』、中央公論社、東京、1989。

津本陽『幕末巨龍伝』、新潮社、東京、1984。

また、伝記としては次のものがある；

北畠道龍顕彰会編『豪僧北畠道龍』、北畠道龍顕彰会、和歌山、1956。

これによれば、国史学者の黒板勝美は講演で北畠道龍を「近世和歌山の三漢学者」の1人に挙げ、自身もその教え子であると述べた。「聴衆はこれまで北畠道龍は豪僧、武道の達人であるとばかり思っていたので、さらにまた大学者でもあったことを斯界の権威である博士から聞かされて、今更の如く驚いた」とある（p. 112）。

滞在中にはサンスクリット学者オルデンベルク（Hermann Oldenberg 1854-1920）、マックス・ミュラー（Friedrich Max Müller 1823-1900）等と会談した。自ら興した講法学舎においてはドイツ語を講じるなど学究肌な部分もあった。

その後、ケイラスはイギリスに移り住み、1年ほど滞在した。この時期は、日本の学界、特に宗教研究の分野においては、特筆すべき時点にあたる。笠原研壽（1852-1883）と南條文雄（1849-1927）がオックスフォードに滞在したのは、1876年から1884年である。彼らは1879年からマックス・ミュラーに師事した。当時マックス・ミュラーは既にオックスフォードを退き、ドイツのシュトラスブルグ大学で講義していたが、南條は直接的にはマックス・ミュラーの弟子のマクドネルの指導を受けながら、勉強を進めていた。後にケイラスは自ら編集した雑誌 *The Open Court* の初期の号にマックス・ミュラーの論文を連載している。また、ケイラスとマックス・ミュラーの間で交わされた書簡は南イリノイ大学カーボンデイル校モリス図書館の所蔵資料中に多く残っている。

笠原と南條がマックス・ミュラーとともに *Sukhāvatīvyūha*（『無量寿経』『阿弥陀経』）を校訂したのは1883年である。[18] 笠原はここで客死したが、翌年帰国した南條は帝国大学の講師としてサンスクリットを講じた。

4　1893年のシカゴ万国宗教会議

1884年にアメリカに渡航したポール・ケイラスは、翌年、その最初の英文の著書である *Monism and Meliorism*[19] を出版した。これが雑誌 *The Open Court* のオーナーであったヘゲラー（Edward Carl Hegeler 1835-1910）[20] の目に偶然とまった。3年後、ケイラスはこの雑誌の編集者に採用され、オープン・コート出版社に勤務することになる。この時彼は科学的基礎の上に立つ宗教を確立することを目指して編集の任を負った。

数年後、シカゴで大規模な催しが行われた。1893年に開かれたコロンブス大陸発見記念シカゴ万国博覧会に際して世界宗教会議が行われたのである。様々な宗教を代表する話者が世界中から招待された。この時、万博の開会式のためにシカゴ市の南端のミシガン湖畔に集まった人々は200,000人、万国宗教会議に立ち寄ったのは150,000人[21] だと言う。ケイラスは宗教会議の評議員であり、自らも分科会で発表した[22]。この大会は彼の転機となった。

18）F. Max Müller & B. Nanjio（ed.），*Sukhāvatīvyūha*，（1：Text & Translation of Sanghavarmant's Chinese version of the poetical portions of the *Sukhāvatīvyūha*，2：Sanskrit Text of the smaller *Sukhāvatīvyūha*），Clarendon Press, Oxford, 1883.

19）Carus, *Monism and Meliorism*, New York, 1885.

20）ヘゲラーはザクセンで生まれ、フライブルグの Königliche 鉱山学校を卒業し、1856年にアメリカに渡った。彼はイリノイのラ・サールに住み着き、そこで鉛加工業においてめざましい成功を収めた。また、宗教に関する独自の考え方があった彼は、そこで雑誌 *The Open Court* を創刊した。この雑誌の主な目的は「科学と宗教の融合に資する貢献を行うこと」（Henderson, op. cit., p. 44）であった。ヘゲラー自身もこの雑誌に「倫理の基盤」（"The basis of ethics," *The Open Court*, 1.1, p. 18-22）、「私にとっての一元論的宗教」（"What the monistic religion is to me," *The Open Court*, 1.25, p. 725）などの論文を寄せた。

21）Richard Hughes Seager, *The World Parliament of Religions*, Indiana, 1987, p. 3.

宗教会議では、日本仏教の各宗派等から5人の代表者が出席した。[23] この中の臨済宗円覚寺管長、釋宗演（1859-1919）がケイラスの注意をひいた。[24] 釋宗演にケイラスを紹介したのは、雑誌 *Monist* の長期購読者で、この人は、ケイラスを仏教の理解者にできれば他の庶民を説得するよりずっと効果的であると釋宗演に助言した。[25] ケイラスは会議終了後、釋宗演、土宜法龍、野村洋三を自宅に招き、歓待した。この会議でケイラスはセイロンの代表ダルマパーラ（Anagārika Dharmapāla 1864-1933）とも交流を持った。ケイラスは以後彼らと連絡を取りあった。

さて、ケイラスが接触したダルマパーラと釋宗演にはどのようなつながりがあったか。釋宗演はこの会議に先立って、1887年から3年間セイロンに留学している。当時、セイロンには、西本願寺幹部であった赤松連城（1841-1919）、真言宗僧侶で大隈重信らの帰依を受けた明治の傑僧釋雲照の甥、釋興然（1848-1924）らの日本人僧侶が長期留学していた。釋宗演は臨済宗、赤松連城は浄土真宗、釋興然は真言宗である。この時期は、廃仏毀釈後の日本仏教再興を目指した若手僧侶たちが宗派を超えて改革運動に協力している時期にあたる。

一方、セイロンにおいても英国の植民地支配のもとでキリスト教に抑圧されていた仏教勢が、オルコット大佐（Henry Olcott 1832-1907）、ダルマパーラら神智学徒の旗振りのもとで巻き返しを図っていた。この2人は平井金三（1859-1916）らの熱い要請に応えて1889年にはともに来日している。[26]

釋興然は1890年にキャンディにおいて具足戒を受け、日本人としてはじめての上座仏教の僧侶となった真言宗の僧侶である。1891年にはダルマパーラを伴って聖地の復興のためにブッダガヤにも赴いた。日本に帰国後は南方仏教の戒律をまもりながら質素な生活を守り続けた。

このような釋興然と豪放磊落で大乗仏教至上主義であった釋宗演との間に接点を見るのは難しそうに見える。しかし、この留学中に2人は邂逅し、「他郷で同胞に会う嬉しさ」を噛みしめ、[27] 以後親しく交際した。

この2人の友情は帰国後も続く。釋興然は留学前にはインド行きを志して南條文雄にサンスクリットを学んでいたが、セイロン留学からの帰国後にはアメリカ渡航前の鈴木大拙にパーリ語を教授した。釋興然への師事を鈴木大拙に勧めたのは釋宗演である。ちなみに、チベット探検で名高い河口慧海も同時期に神奈川県三会寺に滞在し、釋興然からサンスクリットを学んでいる。

22）この時 ケイラスが読んだ原稿は長谷川天渓（1876-1940）によって翻訳された。彼はこれをケイラスの著書の日本語訳『科學的宗教』の附録とした（「宗教的天啓としての科學」、パウル・ケイラス著、長谷川誠也（天渓）訳、姉崎正治校閲『科學的宗教』鴻盟社、東京、1899）。自然主義文学を推奨した評論家であり、英文学者としても知られる長谷川天渓は東京専門学校（現早稲田大学）文科を1897年に卒業し、坪内逍遥の推薦で博文館に勤めていた。序文によれば、1896年の夏頃に長谷川は東京帝国大学の外国人教師ケーベル（Raphael Köber, 1848-1923）を訪れた。この時、著者ケイラスからの献呈本としてケーベルがこの本を持っていた。長谷川はこれを借り受け、内容に感銘を受けた。日本語訳『科學的宗教』の巻頭にはケイラスが長谷川に翻訳を許諾する旨を書いた手紙も掲載されており、その日付は1896年9月16日になっている。長谷川天渓、20歳の時である。

23）釋宗演のほか、土宜法龍、八淵蟠龍、芦津実全らが参加していた。

24）宗教会議終了後すぐに釋宗演はその報告を出版した。圓覺寺管長釋洪岳（宗演）『萬國宗教會議一覧』、佐藤茂信（発行）、東京、1894.

25）Henderson, op. ct., pp. 68-69.

26）吉永進一「平井金三、その生涯」『平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究』、平成16年度～平成18年度科学研究補助金基盤研究（C)研究成果報告書、 課題番号16520060、pp.7-30。

27）井上禅定監修、正木晃訳『新訳・釋宗演『西遊日記』』大法輪閣、東京、2001、p. 79。

5　長谷川武次郎によるちりめん本の出版

さて、長谷川武次郎（1853-1938）は1885年に発行しはじめた英文「日本昔噺」シリーズを20巻揃いにしてシカゴ万博で展示した。[28] ちりめん本[29] というのは美しいカラーの挿絵が木版印刷された小ぶりな絵本である。色鮮やかに印刷された和紙の用紙に細かい皺をよせているので、ちりめん布のような手触りがする。このシリーズでは日本の昔噺がヨーロッパの言語で書かれている。この展示品が気に入ったケイラスはすぐに出版契約の交渉をはじめた。長谷川は引き受けてケイラスの注文どおりの本を出版した。[30] さらに2年後には長谷川はケイラスのために2冊目の本を出版した。[31]

武次郎は1885年から1938年までの間にドイツ語フランス語スペイン語など何ヶ国語にもわたる各種出版物を発行した。武次郎の実家、西宮家は京橋で輸入物品を扱っていた商家である。ちりめん本のアイデアを彼は商品の包み紙として使っていたちりめん紙から思いついたらしい。[32] 武次郎は16歳の時から築地のミッションスクールで英語を学んだ。このミッションスクールに1880年に赴任したトンプソン（David Thompson「タムソン」と表記されることが多い）は彼に英語を教授し、洗礼を施した。

長谷川武次郎の出版業には多くの人々の参画があった。彼の英語の先生だったトンプソンは「日本昔噺」の最初の6冊を翻訳している。武次郎が出版したちりめん本は、挿絵を伝統的な日本画の絵師が描き、執筆者や翻訳者には帝国大学のお雇い外国人教師たちが名を連ねた。トンプソンのような米国長老派宣教師、ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）、フローレンツなどの東京帝国大学の外国人教師たちに武次郎はコネクションを持っていた。また、武次郎が依頼した小林永擢（1843-1890）をはじめとする絵師たちの人脈もフェノロサなどを中心とする帝国大学の人脈に繋がっている。当時、在日外国人同士の間には日本研究の学会による繋がりがあった。王立アジア協会（The Royal Asiatic Society）はアジア各地に支部を持ち、優れた現地研究の成果を次々に出版している。イギリスの本部ではこの王立アジア協会の支部を東京にも設立しようと計画したが、日本では、在日アメリカ人の多くが王立（The Royal）と冠することを嫌っていたために実現しなかった。そこで、在日外国人による日本研究の学会は1872年に日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）として独立して誕生した。協会発足の2年後にはイギリス出身のチェンバレンも入会し、ここでいくつもの論文を発表している。[33]

28）Frederic A. Sharf, *Takejiro Hasegawa, Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Books*, Peabody Essex Museum Collections, vol. 130, Peabody Essex Museum , 1994, p. 20.

29）「ちりめん本」については次の研究書を参照されたい。石澤小枝子『ちりめん本のすべて』東京、三弥井書店、2004。

30）ケイラスが出版の校閲を釋宗演に依頼したので、長谷川武次郎は宗演に会いに東慶寺に行った。そこで、彼は鈴木大拙にも会った（1896年8月10日付長谷川武次郎から釋宗演への書簡）。*Karma* については注3を参照。

31）Carus, *Nirvāna, A Story of Buddhist Philosophy*,〔illustrated and printed by Hasegawa for〕The Open Court Publishing Co., Chicago, 1897.

32）石澤, op. cit., p. 8。

33）楠家重敏『ネズミはまだ生きている ──チェンバレンの伝記──』東京、1986、pp. 111-140。

また、釋宗演が「学術を売る傍ら、実はその裏でキリスト教の宗旨を布教している」と批判した[34]慶応義塾の教師、オックスフォード出身のアーサー・ロイド（Arthur Lloyd 1852-1911）も日本アジア協会の有力な会員の1人であった。彼は、フローレンツの『万葉集』独訳 *Dichtergrüsse aus dem Osten* を英語訳して長谷川出版のちりめん本 *Poetical Greetings from The Far East* を著した人物である。[35]

6　ケイラスと釋宗演 / 鈴木大拙

宗教会議の翌年、ケイラスは著書 *The Gospel of Buddha* を出版した。この本はドイツ語、フランス語、英語に翻訳された45種の仏教文献からの抜粋を集成したものである。書物全体は100章から成り、最初の3章と最後の3章はケイラス自身の作文だった。

彼の野心的な試みは、しかし、マンチェスター・カレッジのカーペンター（J. Estlin Carpenter 1844-1927）から歴史的配慮が欠けているとして厳しく批判された。[36] 文献学的に見れば、仏教は初期の形から進んだ段階へと展開している。ところが、ケイラス著の仏教綱要書 *The Gospel of Buddha* では初期のパーリ語の初期仏教文献がサンスクリットで書かれた後代の複雑な論書の内容と合体している。実際、仏教文献の真面目な研究者達にとっては不可解な書物だったのである。

ケイラスはその論文の中で自分の著作について次のように述べている。「通常に歴史的と言う場合以上に歴史的なものである。それは、仏教の創始期の精神に忠実であるからだ。私は明確な目的意識を持ってある種の変更を導入した。仏教のより高度な進化という文脈において変革の道筋を示しつつ、洗練したものである。*The Gospel of Buddha* はより高貴に『進歩した仏教』の可能性を示すものなのである」。[37]

さて、ケイラスが *The Gospel of Buddha* の巻末に挙げている参照文献の中に、1893年京都出版の赤松連城、*A Brief Account of Shin-Shu* がある。欧米の言語に翻訳された仏教経典の数々に混ざってこの書物が挙げられていることに一見奇異な印象を受けるかもしれない。しかし、このことはセイロンの仏教にも日本の仏教にも共感を抱いていたケイラスにとっては極めて当然だったのである。そして、ケイラスの動機は、仏教の改革に熱中していた当時のセイロン人や日本人こそ理解できるものだった。カーペンターとは対照的にセイロンのダルマパーラはケイラスの *The Gospel of Buddha* を高く評価して次のように書き送っている。「欧米の学者たちの中で唯一あなたこそが仏教の奥義を適切に翻訳したと

---

34)「理哲二學の前虎、耶蘇基督の後狼と、同時に入り來りて、各々爪を磨し、牙を露す。…〔中略〕…現に本塾の雇教師キッチンと云ひロイドと云ひ、皆是外教宣教師にして、而して文明國と稱する英米の、大學を卒業したる嚴然たる一大博士なり。其れ如是宗旨と學術とを兼備へて、遠く東洋の一隅に來り、學術を賣るの傍ら、宗旨を冥々裡に幡布する、其の手段の巧者なる膽力の傍若なる、吾輩の實に憤怒する緣由なり」（長尾大學編『宗演禪師書翰集』二松堂、東京、1921、p. 20）。ロイドはインドで生まれ、ケンブリッジ大学を卒業後、チュービンゲン大学でサンスクリットを習得、オックスフォードのマックス・ミュラーから仏教研究上の指導を受けた。当時、ロイド以上に仏教文献に精通しているヨーロッパ人はほとんどいないと言われていた。英国国教会の宣教師として慶応義塾でも布教活動を行い宗演の反発をかったロイドであるが、その晩年には「日本の仏教徒を真宗の教義を用いてキリスト教に導く」努力をしていることを告白している（白石尭子『福沢諭吉と宣教師たち―知られざる明治期の日英関係』、未來社、東京、1999、pp. 161-211, 249-273）。

35) 石澤, op. cit., p. 155-159。

36) J. Estlin Carpenter "Review of *The Gospel of Buddha* by P. Carus," *New World*, vol. 4, 1895, pp. 157-158.

37) Carus, "Scholaromania," *The Open Court*, 9.12, p. 4436.

私は確信しているのです」[38]。ダルマパーラは、彼の雑誌 *Maha Bodhi Journal* に *The Gospel of Buddha* から複数の章を再掲載した。

日本の釋宗演もケイラスの新しい著書を支持した。1894年の手紙で、彼はケイラスがニルヴァーナを「今生と関連付けて、現実的、積極的、前向きかつかなり楽観的に前向きにとらえている点で」正確に表現していると書き送った。[39] また、別の手紙では「仏教の聖典はあまりに多いので初心者はどこから学びはじめてよいか分からずに途方に暮れます。あなたの御著書はちょうどそうした人たちの需要を満たします」と書いた。[40]

釋宗演を禅師としていた鈴木大拙はケイラスへの手紙の中で *The Gospel of Buddha* の翻訳者として自己紹介し、次のように書き送った。「私たちは西洋の思想家であるあなたが仏教の教義を正しく理解してくれていることを大変喜ばしく思っています。あなたもご存知のように、大方は仏教を虚無主義や悲観主義とみなすような偏見を抱いているからです」。[41]

1896年1月15日の手紙で、釋宗演は鈴木を推薦して次のように述べている。「彼はあなたの様々な著作から読み取れる健全な信仰に非常に感銘を受けたと言っています。彼は渡米してあなたのもとで個人的な指導を受けながら学びたいと切望しています」。[42] ケイラスはこの推薦を受けて、鈴木大拙の採用を決めた。

鈴木は1897年にラ・サールに到着し、ケイラスとその一族のもとで働き始める。鈴木はケイラスが『老子道徳経』を翻訳するのを手伝い、[43] オープン・コート誌に短い論文を寄稿し、[44]『大乗起信論』を翻訳[45] した。後にラ・サールを去る前には、著書 *Outlines of Mahāyāna Buddhism* を出版した。[46] しかし、この著作はプサン（Luis de la Vallée Poussin 1869-1987）によって文献学的見地から鋭く批判された。[47]

鈴木は仏教用語を記述する際にしばしば基本的な間違いを犯して[48]、仏教経典に関する基礎的な知

---

38) I believe among the European scholars you are the only one who have properly interpreted the doctrine. 1895年12月10日付のダルマパーラからケイラスあて書簡。Henderson, op. cit., p. 96.

39) [presented Nirvana] as relating to this life and as real, positive, altruistic, and rather optimistic. 1894年5月17日付の釋宗演からケイラスあて書簡。Henderson, op. cit., p. 95.

40) The sacred books of Buddhism are so numerous that its beginners are at loss how to begin their study. …and it has been our endeavor to sketch out Buddha's doctrines plainly and concisely. Your book just fills the place. 1894年11月7日の釋宗演からケイラスあて書簡。Henderson, op. cit., p. 95.

41) We are very glad that you as a Western thinker have rightly comprehend the principles of Buddhism while most of them are prejudiced to looks at Buddhism as nihilism or pessimism, as you know. 1895年3月10日付の鈴木大拙からケイラスあて書簡。Henderson, op. cit., p. 96.

42) He tells me that he has been so greatly inspired by your sound faith which is perceptible in your various works, that he earnestly desires to go abroad and to study under your personal guidance. 1896年1月15日付釋宗演から鈴木大拙宛書簡。Henderson, op. cit., p. 100.

43) Henderson, op. cit., p. 103.

44) Daisez Suzuki, "The breadth of Buddhism," *The Open Court*, 14.1, 1900, pp. 51-53.

45) Suzuki, *Discourse on the Awakening of Faith in the Mahayana*, The Open Court Publishing Co., Chicago, 1900.

46) Suzuki, Outlines of Mahayana Buddhism, Luzac, London, 1908.

47) Louis de la Vallée Poussin, "Review [of Outlines of Mahayana Buddhism by D. Suzuki]," *The Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London*, 1908, pp. 885- 894.

48) ibid., p. 888.

識の不足を露呈した。彼は古い時代から伝わる仏教文献をありのままに解釈せず、自説に都合の良いように読んだ。プサンはその問題点を取り上げ、大拙がヴェーダーンタやドイツ哲学の影響を受けて仏教を誤解していると指摘した。[49] しかし、プサンの指摘でもっと重要なのは、「鈴木の本は〔日本の〕真言宗の考え方の影響を受けているように見える」というものである。この考え方とは「全てのものはブッダの化身であり、即身成仏できる」[50] というものだ。これは真言宗に限らず日本文化に広く見られる考え方である。鈴木が「大乗仏教」と呼んだものは実際のところ、日本文化の反映に他ならなかった。

ケイラスは「普遍的な真実を体現する世界宗教たる高貴な信仰を実現する」ことを意図した。この目的のために彼は「仏教によってキリスト教を洗練し、キリスト教によって仏教を洗練」[51] しようと試みた。彼は決して仏教に転向したわけではない。

一方、釋宗演と鈴木は「大乗」の宣揚者であった。彼らの「大乗」は「日本教」と同義であったから、要するに彼らは日本の文化の宣揚者であった。「列強の一国として大日本帝国は偉大な宗教を擁するべきである！」という信念に基づいていた点で彼らは日本近代化の立役者たちの忠実な後継者であった。ケイラスは図らずもこの時期、彼らに与する結果になったのである。

7　おわりに

さて、ケイラスが日本と組んで行ったビジネスは順調に進み、*Karma* は、第2版、第3版と版を重ねていった。しかし、1897年11月のちりめん本 *Nirvāna* の出版で、長谷川武次郎との仕事は最後となる。後にケイラスが鈴木大拙に送った手紙では日本の商人との仕事には懲りたかのような言説を残してもいる。[52]

しかし、オープン・コート出版社による日本人の著作の出版は後々まで続いた。例えば、1906年には *Sermons of a Buddhist Abbot* を発行しているが、これは釋宗演の書簡やアメリカで行った講話をまとめて鈴木大拙が出版したものである。[53] また、売り込みもあった。1910年には井上哲次郎の原稿を却下する手紙がある。[54]「日本のメシヤ」を名乗る宮崎虎之助（1872-1929）から送られてきた著作についてケイラスが大拙に問い合わせる手紙も残っている。[55]

49）ibid., p. 886.

50）ibid., p. 893-894.

51）Carus, The Gospel of Buddha, pp. x-xi, xv.

52）You remember that I had had experiences with business men of Japan, and I would certainly have had more addition to Karma, and perhaps other book made in Japan and in Japanese style if I had better experiences with the business methods of Japanese publishers. 1913年9月11日付ケイラスから鈴木に送った書簡。

53）Soen, Shaku, *Sermons of a Buddhist abbot： Addresses on Religious Subjects.* The Open Court Pub. Co., Chicago, 1900.

54）1910年3月11日付ケイラスから鈴木への書簡。

55）宮崎虎之助は仏陀、・キリストに次ぐ予言者、メシヤであると自称し1904年に『我が福音』を著した。彼はこの本をケイラスに送付したが、受け取ったケイラスは困惑した。

I will say in reply to the letter that I answered its author at once, and as you correctly foresaw, I did not find it worth while the reading of his New Gospel. 1910年3月11日付ケイラスから鈴木に送った書簡。

鈴木「『予言者』宮崎虎之助の宗教」『中央仏教』第2巻第4号、1918年（『鈴木大拙全集』第31巻所収）参照。

また、宮崎は釋宗演が引導を行った夏目漱石の葬儀にも参列して顰蹙をかっている。その顛末については、芥川龍之介「葬儀記」（『新思潮』1917年3月、『羅生門・鼻・芋粥』、角川文庫、1950所収）を参照。

ポール・ケイラスがオープン・コート出版社で行った事業は、今日の同種の仕事とは比較して考えられないような高度に文化的な活動であった。その出版物には、執筆者として各国の学識経験者が深く関わっていた。それらは帝国大学を始めとする日本の教育機関で教科書としてあるいは参考書として用いられた。近代化を目指しながら教育や宗教の改革を模索していた当時の日本の知識人たちにとって、ケイラスの仕事は重要な意味を持っていたのである。

※ 本稿は次の英文原稿の日本語版である。Kayoko Nagao, "Paul Carus as Involved in the Modernizaition of Japan," *Japanese Religions*, Christian Center for the Study of Japanese Religions, 2008.

※ 本稿の執筆にあたっては南イリノイ大学カーボンデイル校モリス図書館所蔵資料を参照した。関係者に改めて謝意を示したい。